



35 聚沙為塔図

# 鉄齋 — 神仏敬仰 —

平成25年 9月14日〔土〕 - 12月1日〔日〕

前期 9月14日〔土〕 - 10月23日〔水〕

後期 10月27日〔日〕 - 12月1日〔日〕

10時~16時

月曜日休館 但し9月16日・23日、10月14日、11月4日は開館 翌日休館

近代文人画の巨匠と謳われる富岡鉄斎（1836～1924）は、89歳で没するまで万余の作品を遺した。今回はその中でも鉄斎が敬仰した日本古来の神々、儒教や道教の神々、そして仏たちを描いた作品を中心に取り上げることとする。

鉄斎は江戸時代中期より京都で法衣商を営む十一屋伝兵衛維叙これのぶの次男として生を受けた。富岡家は三代目十一屋伝兵衛以直もちなお以来、神道・儒教・仏教の教えを基盤とし老荘思想をも取り入れた石田梅岩ばいがんの石門心学を家学としてきた。富岡以直（1717～1787）は通称忠助、諱は浄敬いんかといい梅岩の説く心学を信奉し、その直門で明倫舎を起し心学の布教と統制に専心した手島堵庵てしまとあん（1718～86）に次ぐ高弟であった。以直は祖先の中でも特に重んじられ、その教えを代々守ってきたのである。鉄斎は生涯心学の祖石田梅岩を尊崇し、遠祖に以直のあることを誇りとしてきた。奇しくも以直の命日12月19日は鉄斎の誕生日と同日であった。

富岡家は石門心学の質素、儉約を重んじる雰囲気が家風として濃厚で、学問を重んじる家であった。そうした環境の中で多感な少年期を過ごした鉄斎は、自然に心学の素養を培い、そのことが国学を復古神道を唱える野之口（大国）隆正に、漢学を実学を重んじる岩垣月洲げつしゅうに、さらに春日潜庵せんあんに陽明学を学ぶ道へと導いたといえるのではなからうか。慈悲深い大田垣蓮月尼の薫陶を受けたことも忘れてはならないだろう。鉄斎が教えを受けた師はみな勤皇派の面々であった。おおよそ21歳を迎える頃までには学問や思想の方向性を見出し、24、5歳の頃には叡山の学僧羅漢慈本に漢詩文を学び、仏教についても教えを受けていたと考えられる。

自身は儒者を志し、27歳の時私塾「誠志塾」を開く傍ら学問に精進した。勤皇のことはかり国事に奔走した後、日本各地を巡遊し歴史に名を遺す史跡や陵墓の探索をし、古社寺を訪れ、保存や復興にも力をそそいだ。明治9年（1876）石上神社いそのかみ（奈良県天理市）少宮司に、同年大鳥神社（大阪府堺市）大宮司に任命され、同14年、

兄八代目伝兵衛敬憲の死により京都に帰るため、神官の職を辞すまでの6年間、荒廃していた社殿を復興するために書画の潤筆料を当て、文字通り粉骨砕身の努力を惜しまなかった。大鳥神社から授与された「受証」にあがる奉納品の数々は、鉄斎の神社復興に費やした情熱を如実に物語っている。また明治天皇巡幸の道筋を実地検分し《神社并御陵位置図巻》を完成した。鉄斎にとっては充実の時代であったといえるだろう。その後、同21年（1888）には車折神社（京都市）の祠掌となり、同26年に辞職するまで復興に努めた。帰洛の後、上京区室町通一条下ル薬屋町に居を定め、終生儒者としての矜持を持ち、絵はあくまで余技として生きる姿勢を貫いたのであった。敬神の念篤い鉄斎は毎朝、東方に向かって伊勢神宮を遙拝し祝詞をあげ、次いで四方の神々を拝むことを、亡くなるまでほとんど欠かすことはなかった。

鉄斎は生涯に数万点ともいわれる和漢の書を収蔵し、読破した万卷の書から得た該博な学識を自家薬籠中に蓄え、画囊を肥やし、それらを源泉にして神道・儒教はじめ仏教・道教にかかわる多くの道釈画を生み出していったのである。

それでは作品を見てゆきたい。国学を修め神官を勤めた鉄斎に、『古事記』や『日本書紀』から《天宇受売命図・猿田毘古命図》（No.15）や、『神武天皇像』（No.7）などのような我が国古来の神話の世界を画題とした作品が多いのは肯ける。《鳩峰・五瀬・春日三景図》（No.8）は三幅にそれぞれ石清水八幡宮、伊勢神宮、春日大社の景を大和絵風に描き分け美しい作品となった。88歳作の《宮比福御影》（No.62）には伏せた桶を踏んで舞い踊る天宇受売命が描かれ、その頭上に神代文字を書している。書画一致ともいえる動きのある作品となった。



百原不磨堂  
一理馬



27 釈尊出山図

仏教に造詣の深い鉄斎は釈迦如来像をはじめ、若い頃より観音像、十六羅漢像、あるいは《聚沙為塔図》(No.35)など經典に取材した作品のほか、弘法大師(No.65)や法然上人(No.17)、一休禪師(No.67)など名僧を描くものなど、作品の画題は広く枚挙にいとまがない。尚、観音像については「鉄斎の粉本一画想の源泉・摸写Ⅲ」展(2008)出品目録を参照されたい。

富岡家の宗旨は浄土真宗大谷派であったが、鉄斎は宗旨に片寄ることなく浄土宗の祖法然上人(円光大師)作とされる阿弥陀(無量寿仏)像を念持仏として大切に祀っていた。《画道一枚起請文》(No.17)には阿弥陀像を彫る法然の姿が描かれ、法然の遺戒「一枚起請文」の摺物などが合装され、鉄斎の絵画観を解する上で大切な一文である画道一枚起請文が書かれて一巻となっている。因みに鉄斎は堂号を「無量寿仏堂」とし、大正11年に落成した画室の号ともした。

釈迦を敬う鉄斎には釈迦を画題とした作品も多い。中でも《釈尊出山図》(No.27)は「すべてに典拠有り」とした鉄斎の本領發揮とも云うべき作品である。釈尊出山は道釈画の画題で、釈迦が出家して山にこもり、6年の苦行を経て山を出て真の悟りに向かう姿を描く。鉄斎の描いた本図には原画の粉本(摸写)が遺されている。この図の上部、釈迦の頭上に朱で描かれた大きな判は、「釈迦如来の華字」、すなわち釈迦如来の手形といわれるもので、賛には北宋の真宗皇帝讚を書いている。そしてこの手形を貞和3年(1347)に板行した鎌倉建長寺の竺仙梵僊の自序から、義浄三蔵がインドに經典を求めに行ったとき、釈迦如来が手ずから押した手形を得たという由来を引く。鉄斎は東京古印蒐集保存会発行の「釈迦尊心印解説書」(1903)と、釈迦如来華字の上部に真宗皇帝讚のある摺り物、同じく相阿弥の筆になる「釈迦出山図」の摺り物を入手した。これらは《備考小品集》(No.77)と題する一巻に他の粉本類とともにまとめられている。鉄斎は自身の粉本をもとにしてこの図を描き、釈迦如来の華字と賛文は「釈迦尊心印解説書」から引き写した。そして引首印には『華嚴経』を出典とする「心如画師」の印を捺し、落款印には岡山美作誕生寺円光大師(法然上人)手植の棕樹を印材とした六角形の大きな「無量寿仏堂」印(No.88)を捺して、釈尊敬仰の図としたのであった。

華字については別に「仏祖華押考」と題する筆録1冊が遺されている。これは大阪平野大念仏寺や京都西山光明寺の摺り物にある「華字」や高芙蓉の蔵していたものなど4種を蒐集し、「華字」について言及した資料を書写したものである。この中の「華字」の一つは、大正7年(1918)に没した鉄斎の長子謙蔵の追善供養のために是住院に寄納された《釈尊出山図》(『鉄斎研究』13号-12)に描かれた。「仏祖華押考」の最後に鉄斎は「仏祖華押と称するは印判秘訣集に所載す。大同小異皆疑惑を免れず」と書した赤紙を貼っている。

老荘思想に親しんだ鉄斎には道教にかかる作品もまた多い。道教の護符を描いた《五岳真形図》(No.14)、蓬莱山と八仙を描く《寿山福海図》(No.12)や賛に北宋の張君房が編纂した道教の類書『雲笈七籤』の仙境の記事を引く《蓬丘仙境図》(No.59)、《瀛洲僊境図》(No.63)など、多くの美しい仙境図が描かれた。また長寿を何よりの幸福と考えた鉄斎は様々な寿老人図を遺している。これらには寿老人に蝙蝠と鹿が描かれることが多く、それぞれ寿、福、禄をあらわしている。自らの長寿を祝し自作の詩を賛とした《南極仙図》(No.57)のほか、知友の高寿を祝して贈られた《寿老人図》(No.64)には、鹿に腰をかけ見る者を睥睨する寿老人に蝙蝠が描かれ、賛には長寿が最も大切で福と禄がこれに続くことを意味する「福禄、寿先と為る」を書し、生命力の充溢した祝慶の図となった。

最後に鉄斎が描いた三教図を紹介する。孔子、釈迦、老子を一図に描いて儒教・仏教・道教の三教一致の思想をあらわす三教図は、中国や日本で道釈画の画題として描かれてきた。三教図の一つ、《三老吸酢図》(No.37)は儒者の蘇東坡、僧の仏印禪師、道教の黃庭堅の三人が同じ甕の桃花酸を舐めて、共に顔をしかめたが、三教の教義は異なっても起原は同じであるということを比喩している図で、三人の表情には鉄斎の得意とする人物画の力量が大いに発揮されている。賛には明の儒者王陽明の「書三酸」を引く。

また晩年の鉄斎は同じく三教が究極では一致するという思想をあらわす《教祖渡海図》(No.48)や《聖者舟遊図》(No.70)を描いた。達磨が舵を取る船に釈迦、観音、孔子、老子が同乗し、衆生の救済に向かう図がそれである。賛文には室町時代の禅僧万里集九の『梅花无尽藏』から「釈迦観音孔子老子一船。此中達磨取楫図。人參甘草。白朮陳皮。中在毒藥。少林一枝」(「釈迦、観音、孔子、老子が一つの船に乗り、この中に達磨が舵を取っている図。諸聖が苦海に沈む衆生を救うために一つの船に同乗して出かけられるが、その教えは衆生の病に応じて与える人參、甘草、白朮、陳皮のような薬である。少林寺に修行された達磨大師の禅道は苦い薬で、はなはだ辛辣だが、効き目がある」の意)を引いている。《教祖渡海図》は扇形の画面いっぱいに船に乗る諸聖を濃彩で描き、小品ながらも見る者を射貫く迫力を持つ。これとは対称的に《聖者舟遊図》は、蓮の花の咲く中にこぎ出す船は縦長の画面を滑るように降りてくる。船に乗る諸聖はゆったりとすわり穏やかな作品となった。淡彩で描かれた九十落款のこの作品はさわやかで、画面構成も見事であり、鉄斎が最後に到達した宗教観をあらわしているように見える。



70 聖者舟遊図

88歳の鉄斎は住まいの号を「曼陀羅窟」と名付け、「まだらくつ」と読ませた。鉄斎の用印を刻した呉昌碩に扁額を書いてもらって玄関に掲げ、「人は一色ではないかん、色々のものを撮取してマダラなのがよい」と語り、《寿老人図》(No.64)に見られる様に「曼陀羅窟」の印(No.87)も愛用した。印癖を誇る鉄斎は、手元にある数多の印章の中から、神仏を描いた作品にふさわしい印文や印材の印章を選び、引首印や落款印として用いた。今回はこうした印章も作品と併せて展示し、鉄斎が敬仰する神仏を理解する一助にしていきたい。

鉄斎の思想は、石門心学を拠りどころとし、神道・儒教・仏教・道教をおおらかに取り入れたものといえるだろう。鉄斎は自身の敬仰する諸神諸仏に敬虔に真摯に向き合い、時には親しみをこめてユーモラスに筆管を揮った。描かれたさまざまな神仏の姿を通して、鉄斎の人間性や宗教観に触れ、森羅万象すべてを包み込む精神世界をご理解いただければ幸いである。

(奥田素子)

#### [主要参考文献]

富岡益太郎編「富岡鉄斎年譜序文」(『鉄斎研究』4号 鉄斎研究所 1971) / 富岡益太郎「祖父鉄斎の思い出」・富岡とし子「父・鉄斎のこと」(『鉄斎の思い出』富岡益太郎編 鉄斎研究所 1973) / 柴田実「梅岩とその門流-石門心学史研究-」ミネルヴァ書房 1977) / 柴田実「石田梅岩」(人物叢書 吉川弘文館 1988) / 鶴田武良「鉄斎-その文人指向」(『富岡鉄斎 資料編』京都新聞社 1991) / 戦暁梅「鉄斎の陽明学」(勉誠出版 2004) / 奥田素子「鉄斎と黄巖」・「陳賢筆「観音図」画帖」と模写」(『鉄斎の粉本- 画想の源泉- 模写Ⅲ-』鉄斎美術館 2008) / 柏木知子「画道一枚起請文について」(『鉄斎-先賢を画く-』鉄斎美術館 2009)

# 《出品目錄》

[富岡鉄斎作品]

番号	名 称	制作年		年齢	寸 法	材質・彩色	員数
1	普門大士図	慶応2	1866	31	150.1×50.6	紙本淡彩	1幅
2	十六羅漢像	慶応4	1868	33	128.5×28.8	紙本着色	1幅
3	高千穂峰図	明治5	1872	37	134.0×30.6	紙本淡彩	1幅
4	魁星図			30代	36.2×52.3	絹本淡彩	1幅
5	筑波山真景図			40代	136.3×52.2	紙本着色	1幅
6	蝦夷人鶴舞図			40代	118.7×45.8	紙本淡彩	1幅
7	神武天皇像			50代	129.7×42.3	紙本着色	1幅
8	鳩峰・五瀬・春日三景図			50代	各127.2×50.3	絹本着色	3幅
9	太秦牛祭図	明治30	1897	62	149.0×53.0	紙本着色	1幅
10	漢織呉織二女像	明治31	1898	63	105.6×33.2	絹本着色	1幅
11	仏説摩訶酒仏妙楽經	明治31	1898	63	32.0×260.8	紙本墨書	1卷
12	寿山福海図	明治32	1899	64	各127.8×50.1	絹本着色	3幅
13	観世音菩薩育子図	明治33	1900	65	127.3×51.0	絹本着色	1幅
14	五岳真形図	明治36	1903	68	31.1×140.8	紙本着色	1卷
15	天字受壳命図・猿田毘古命図			60代	各120.2×28.8	紙本淡彩	2幅
16	七福遊戯図			60代	30.0×192.8	紙本着色	1卷
17	画道一枚起請文	明治38	1905	70	29.1×275.6	紙本淡彩・墨書	1卷
18	十六応真画像	明治39	1906	71	156.8×71.0	絹本着色	1幅
19	寿山福海図・神仙採薬図	明治40	1907	72	各128.4×40.7	絹本着色	2幅
20	十六羅漢画卷	明治42	1909	74	19.4×345.5	紙本淡彩	1卷
21	慈悲菩薩像	明治43	1910	75	133.0×32.6	紙本墨画	1幅
22	薬王菩薩像	明治45	1912	77	151.5×41.6	紙本墨画	1幅
23	黄不動明王画像	大正2	1913	78	135.3×50.8	絹本着色	1幅
24	鐘馗騎虎図	大正3	1914	79	136.4×54.8	紙本着色	1幅
25	静観楽事帖	大正3	1914	79	各10.7×25.3	紙本着色	1帖
26	蝦夷人熊祭図			70代	135.5×41.7	紙本着色	1幅
27	釈尊出山図			70代	180.0×47.8	紙本着色	1幅
28	薬師如来像			70代	173.0×61.9	紙本淡彩	1幅
29	普陀落山観世音菩薩像			70代	147.0×41.7	絹本着色	1幅
30	十六羅漢図			70代	42.9×132.2	絹本着色	1面
31	梅山幽趣図	大正4	1915	80	130.0×42.0	絹本着色	1幅
32	文字市若布刈神事図	大正5	1916	81	100.0×45.1	紙本淡彩	1幅
33	東方朔捧桃図	大正5	1916	81	132.0×64.5	紙本着色	1幅
34	献珠成仏図	大正6	1917	82	73.3×67.2	絹本着色	1面
35	聚沙為塔図	大正6	1917	82	73.2×66.0	絹本着色	1面
36	日月三星無量寿仏図	大正6	1917	82	132.4×32.2	紙本淡彩	1幅
37	三老吸酢図	大正7	1918	83	137.7×40.2	紙本淡彩	1幅
38	党歆僧正修法図	大正7	1918	83	16.5×52.8	紙本墨画	1幅(扇面)
39	大布放賭図	大正8	1919	84	136.4×35.3	紙本着色	1幅
40	大国主大神像	大正8	1919	84	129.0×32.0	紙本墨画	1幅
41	大国大神神影	大正9	1920	85	127.6×43.7	紺紙金泥	1幅
42	蓬莱群僊会図	大正9	1920	85	190.5×58.4	紙本淡彩	1幅
43	洛西大秦瑠璃光如来画像	大正9	1920	85	135.7×38.0	紙本淡彩	1幅
44	東坡謁仏印図	大正9	1920	85	133.0×33.6	紙本淡彩	1幅
45	小化城図	大正9	1920	85	17.8×55.0	紙本墨画	1幅(扇面)
46	観世音菩薩像	大正9	1920	85	163.8×47.1	紙本淡彩	1幅
47	布袋遊戯図	大正10	1921	86	130.4×31.5	紙本墨画	1幅
48	教祖渡海図	大正10	1921	86	16.6×54.0	絹本着色	1面(扇面)
49	補陀落迦山図	大正10	1921	86	146.1×40.6	紙本着色	1幅
50	羅漢図	大正11	1922	87	71.1×66.8	絹本着色	1面
51	七福遊戯図	大正11	1922	87	141.6×41.3	絹本着色	1幅
52	三尊窟靈蹟図	大正11	1922	87	168.6×42.9	紙本墨画	1幅
53	南海普陀山図	大正12	1923	88	130.8×65.0	紙本墨画	1幅
54	普陀落山観世音菩薩像	大正12	1923	88	130.8×65.3	紙本淡彩	1幅
55	青龍起雲図	大正12	1923	88	133.6×32.4	紙本淡彩	1幅
56	古仏龕図	大正12	1923	88	149.7×39.8	紙本着色	1幅
57	南極仙図	大正12	1923	88	133.1×32.2	紙本淡彩	1幅
58	雲山化城図	大正12	1923	88	133.5×33.5	紙本墨画	1幅

59	蓬丘仙境図	大正12	1923	88	175.1×48.0	紙本着色	1幅
60	吉祥聚叢図	大正12	1923	88	131.3×44.9	紙本淡彩	1幅
61	金粟如来維摩詰像	大正12	1923	88	96.3×43.0	紙本淡彩	1幅
62	宮比福御影	大正12	1923	88	128.5×32.2	紙本淡彩	1幅
63	瀛洲傳境図	大正12	1923	88	135.3×51.5	絹本着色	1幅
64	寿老人図	大正13	1924	89	133.4×51.2	紙本着色	1幅
65	弘法大師在唐遊歴図	大正13	1924	89	132.9×33.3	紙本淡彩	1幅
66	巖栖十八羅漢囲碁図	大正13	1924	89	144.6×39.2	紙本淡彩	1幅
67	聖者問答図	大正13	1924	89	132.6×32.2	紙本淡彩	1幅
68	普陀落山觀世音菩薩像	大正13	1924	89	89.3×32.8	紙本淡彩	1幅
69	昇天龍図	大正13	1924	89	132.2×32.0	紙本墨画	1幅
70	聖者舟遊図	大正13	1924	89	143.8×39.6	紙本淡彩	1幅
71	大慈悲仏図	大正13	1924	89	77.1×65.0 67.7×65.0	絹本着色	2面

[粉本]

番号	名 称	制作年		年齢	本紙寸法	材質・彩色	員数
72	宝船図集	明治29	1896	61	29.2×634.6	紙本墨書	1巻
73	摸狩野元信筆 魔王大僧正図	明治29	1896	61	34.5×93.0	紙本墨画・墨書	1巻
74	伎芸天女図・訶利帝母図記				33.0×165.0	紙本淡彩	1巻
75	摸陳元藻筆 十八羅漢図				32.4×430.8	紙本墨画	1巻
76	角大師像考				28.0×286.5	紙本墨書	1巻
77	備考小品集				37.8×423.0	紙本墨画	1巻

[印章]

番号	名 称	刻者・制作者	制作年	寸法(縦×横×高)	材質	員数	備考
78	「魁星図」印	富岡鉄斎下絵	明治36 (1903)	9.6×6.0×3.2	桜	1顆	東本願寺21世大谷光勝贈
79	「五岳真形図」印	山本拝石刻	明治4 (1871)	2.9×2.1×6.4	寿山石	1顆	
80	「做好人行好事説好書説好話」印		明治時代後期	3.5×3.4×2.9	青田石	1顆	
81	「現居士身」印	西園寺公望刻	大正6 (1917)	2.6×2.6×8.5	白寿山石	1顆	
82	「子孫千万」印	桑名鉄城刻 富岡鉄斎造 四代清水六兵衛焼 清人刻	明治時代後期	径14.0×6.8	陶緑釉	1顆	
83	「千人万人中式人半人知」印			3.6×3.7×8.2	馬肉斑寿山石	1顆	
84	「鉄道人書画記」印	五世浜村蔵六刻	明治時代後期	10.1×10.1×10.6	榧	1顆	
85	「芬陀利華」印	秦芬陀利刻	明治時代	3.2×2.0×1.7	縞寿山石	1顆	No.89と両面印
86	「報答四恩広行三教」印		清・嘉慶4 (1799)	2.1×2.5×3.0	青田石	1顆	伝丁敬身刻
87	「曇陀羅窟」印	趙叔孺刻	中華民国12 (1923)	3.0×3.0×6.4	白岬石	1顆	
88	「無量寿仏堂」印	桑名鉄城刻	明治39 (1906)	9.3×10.4×8.9	棕	1顆	
89	「蓮華水瓶図」印	秦芬陀利刻	明治時代	3.2×1.9×1.7	縞寿山石	1顆	No.85と両面印

・ 出品作品は期間中下記の通り 2 回にわけて展示します。但し一部重複することがあります。  
前期 9月14日(土)～10月23日(水) 後期 10月27日(日)～12月1日(日)

・ 下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。  
9月28日、10月12日、11月9日・23日 各土曜日の午後1時30分より

・ 次回展覧会 「鉄斎－扇絵を楽しむ－」  
平成26年1月4日(土)～2月11日(火・祝)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地  
TEL (0797) 84-9600  
FAX (0797) 84-6699  
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>

平成25年9月4日 印施